

第 2 号



オキナグサ（翁草）

キンポウゲの仲間で、山の明るい草原にはえる多年草。おきな翁とはおじいさんのことで、花が終わったあとに長い羽毛状の実の集まりをつけるため、それを老人の白髪にたとえてつけられた名前だといわれています。環境の悪化や乱獲のためにほとんど見られなくなってしまった植物の1つです。



福井県自然保護センター

アシナガバチの生活

福井昆虫研究会 羽田義任
ナチュラリストリーダー

福井県には、6種類のアシナガバチがいます。この中で、フタモンアシナガバチとセグロアシナガバチは人家付近に多く、コアシナガバチとキボシアシナガバチは山寄りの所に住み、キアシナガバチとヤマトアシナガバチは里の住人です。どの種類も、六角形の育房を持った、つり鐘形の巣を作ります。アシナガバチの生活を調べるには、まず巣を見つけることから始めましょう。

1. 春の巣

サクラの花の咲くころ、越冬したメスバチは活動を始めます。1匹で、巣づくり、産卵、育児をします。労働力に限りがあるので、巣はせいぜい20室までの小さなものです。

このころのハチは攻撃性が弱く、巣に近づいても刺すことはありません。おどかしたりすると、ハチのほうが逃げてしまいます。作りかけた巣を捨てて、ほかの所に別の巣を作り始めることもあります。

巣は、風化した草木の纖維をだ液で固めた紙のような材質で出来ています。ハチの種類によって、巣の形や色合いが少しずつ違いますから、巣を見ればどの種のハチが作ったものかすぐ分かります。

巣の支柱は、漆で黒く固められ、大変丈夫です。ハチは絶えず支柱の手入れをしますが、これは支柱を強くする目的のほか、アリなどの天敵の侵入を防ぐ物質をぬり付けているのだといわれています。

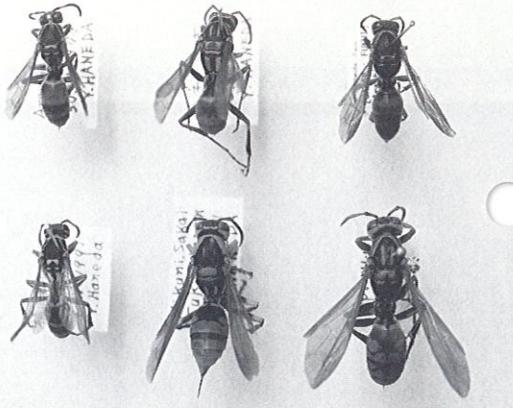
卵は育房の底に生み付けられ、1週間ぐらいでふ化します。幼虫の食べ物は、チョウやガの幼虫（アオムシ、ケムシ）です。ハチはアオムシを見つけると、これを口でかみつぶ

して肉団子にし、巣に持ち帰って幼虫に与えます。

成熟した幼虫は、口から糸を出して育房にふたをして、その中でさなぎとなります。

ふた（繭）の色は種類によってきまっています。キボシアシナガバチとヤマトアシナガバチは黄色いふたをし、後の4種は白いふたをします。なぜこのような色の違いがあるのか、詳しいことはまだ分かっていません。

このように、4月中旬から6月上旬までに見られるアシナガバチの生活は、いわゆる独居性生活で、1匹の母バチがすべての仕事をしているのです。



2. 夏の巣

さなぎが羽化して娘バチが生まれて来ると、母バチは産卵以外の仕事はしなくなります。母娘間に、女王バチと働きバチという階級制が生じるので。巣の拡張や育児の仕事はたくさんの働きバチの手で行われるようになります。なので、巣はたちまち大きくなります。

働きバチは巣の防衛本能が強く、巣に近づくものを攻撃します。だから、このころの巣を観察する時は、静かに行動することが大切です。絶えずハチの様子に気を付けながら、少しづつ近寄れば、1m以内のところで観察しても刺されることはありません。

1匹の働きバチが食物を持ち帰ると、巣上のハチは一斉に近寄って食物を分けてもらう光景がよく見られます。この時、ハチの個体間には順位があって、強いものから先に食物をもらうので順番をめぐって争い合うことはありません。

また、働きバチ同士の間にも分業が見られ、幼虫の世話をするもの、巣の手入れをするもの、幼虫の食物を運ぶものなど、役割分担がきまっています。これはハチの日齢（羽化してからの日数）によって変化するようです。

巣が雨でぬれると、働きバチは口で水を吸い取り、これを巣の外へ捨てて巣の掃除をしたり、暑い日は、水を運んで来て巣をぬらし、羽を扇風機がわりに動かして、巣内の温度調節をしたりします。

面白い行動は、働きバチが時々触角で幼虫の頭をたたくことです。すると、幼虫の口から透明な液が出てきて、ハチはこれをなめるのです。すなわち、ハチは幼虫にアオムシの肉団子を与える代わりに、幼虫の出す液をもらうのです。これを栄養交換と呼んでいます。これには二つの意味が考えられます。幼虫はさなぎになる直前まで脱ぶんをしませんから、発育に不必要的水分や炭水化物を、成虫に与える形で排せつしているようです。またこの行動は、成虫と幼虫のつながりを強くし、働きバチの巣の防衛力を高める刺激にもなっていると考えられます。

3. 秋の巣（離散・交尾・越冬）

夏の終わり、新しいメスとオスが誕生しますが、これをきっかけに役割分担などの社会生活はくずれ始めます。ハチは仕事をやめ多数が巣上に群がっているだけの状態になります。秋が深まると巣から姿を消し、女王バチと働きバチは冬までにその一生を終えます。

秋の小春日和にアシナガバチが軒先に群飛するのをよく見かけます。これは新しいメスとオスで、この間に交尾が行われます。オスは間もなく死に、受精したメスは朽ち木の中や屋根裏などで越冬し、翌春また巣づくりを始めるのです。

アシナガバチは刺しますが、上手につき合えば大変おとなしいハチです。ハチを見てもこわがらずよく観察して、彼らの素晴らしいその生活を自分の目で確かめてみましょう。



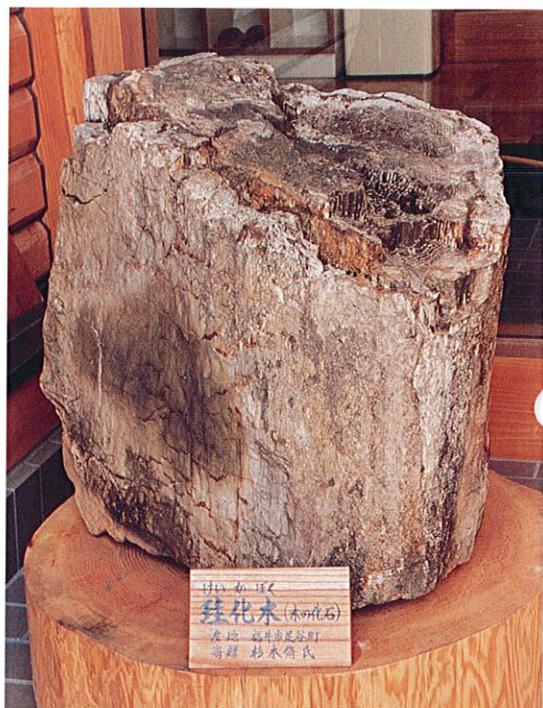
ケイ化木

自然保護センター 多田 雅充

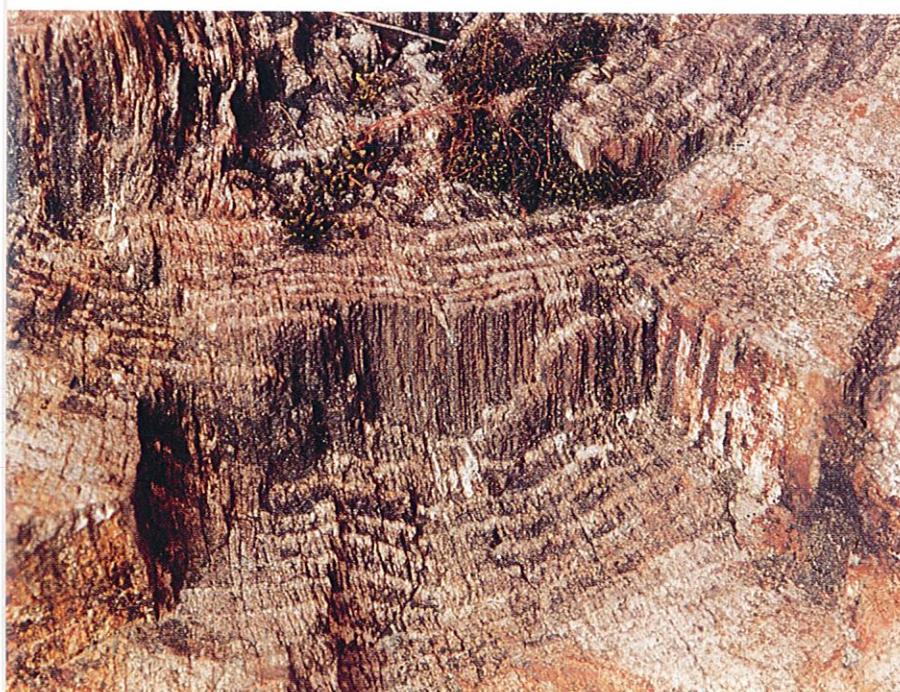
4月17日、自然保護センターの新しい展示物としてケイ化木がやってきました。ケイ化木というのは木の幹の化石のことで、地層に埋もれた木が、長い年月の間に石に変わってしまったものです。このケイ化木は、福井市の足谷町で産出したもので、地元の杉本脩さんが化石の勉強に役立ててほしいと寄贈してくださいました。杉本さんはケイ化木に大変関心を持っておられ、自宅の庭先には今までに集められた見事なケイ化木がいくつも置かれています。今回寄贈していただいたものは、その中の1つで、林道の工事の時に出てきたものをトラクターで自宅まで運ばれたそうです。出てきたときは、今の2倍くらいの長さがあったそうですが、真中にひびが入って2つに割れ、もう片方はすでに福井市の中学校に寄贈されたそうです。

ところで木が石に変わってしまうというと大変不思議な気がしますね。これは木の組織にある小さなすきまに地下水がしみこみ、地下水の中に溶け込んでいるケイ酸などの鉱物分が木の組織と置き変わって長い年月の間に石化するのです。そのために木の組織がうまく保存され、このケイ化木も木の肌や年輪がそのままに残っています。その上、屋外に置かれていたためにセンターにやってきた時は、苔が生えていて本物の木のように見えました。

このケイ化木は直径が約65cm、高さが約70cmあり、年輪から樹齢100年くらいと考えられます。この木が生きていたのは今からおよそ1600万年前、新生代新第三紀中新世とい



時代です。そんな気の遠くなる大昔から、生きていた当時の姿で石になって現れるというのは、なんとも神秘的な感じがしますね。ナチュラリストの皆さんも、自然保護センターに来られた時には、ぜひご覧になって太古の昔に思いをはせてみてください。



オキナグサ考

和泉中学校教頭
ナチュラリストリーダー 山本 留

オキナグサは、かつて六呂師の野や田の畦にごく普通に生えていたそうです。子どもたちは、翁の白髪を連想させる、白くて長い毛のついた種子を丸めてキャッチボールに興じたといいます。

しかし、昭和60年頃に、ふるさと自然公園（通称「丸山公園」）の登りつきの地点で二株見たのを最後に、その後自生のものは見かけていません。近所に住む老人が「この花なら勝原にいっぱいありましたよ。」と話してくれましたが、私は確認できません。たぶん昔はどこにでもたくさん咲いていたのでしょう。

それ故、私にはオキナグサは滅びゆく植物としか映らず、何とかしてこれを増やしたいと考えていました。

かつて、奥越青少年の森に勤務し、熱心な植物研究家であられた故松田秀二氏（自然観察指導員でもあられた）にお聞きしたら「森に勤務の頃は、高尾山にいっぱい咲いていたが、今は遊歩道の下になって全滅した。」とのことでした。ただ、十株ほど移植されたことを教えていただき、増やすことに挑戦してみました。

園芸の書物を何冊か買って調べてみると、株分けによる方法と砂地に種子を撒く二通りの方法が紹介されていましたが、後者の方法を半信半疑ながら実行してみました。結果は良好で、2週間ほどするとほとんどの種子が芽を出しました。そして、次の年にはたくさんの株が開花し、「これはいけるぞ！」と、増やすことに確信を持ったのですが…………。

その後2～3年は順調に咲いたのですが、まもなく消えていく株が出始め、花が咲いても結実率が極端に落ち、しまいには開花しても結実しなくなりました。減る一方なのに種子も取れない…………。一度減びかけた野草を増やすことの困難さを肌で感じる結果となってしまいました。

消えていった原因の一つには、種子の播き方がよくなかったことが考えられます。たくさんの種子を一度に播いたため、種子と種子がくっついて発芽し、それをそのまま移植したために、どんどん成長するにつれて根が互いに圧迫し合ったためであろうと推測されます。

一方、結実しないわけは当然のことながら受粉の問題が考えられますが、花期に特別雨が多かったとも思えないのです。ただ、見ていて花の極端な貧弱さが目立ちました。とにかくかろうじて花らしいものが咲くといった具合でした。今のところ原因は不明です。



ビデオカメラによる天体撮影

自然保護センター 大沢 安一

夜、星を見ていても寒さが苦にならない季節になり、宵の空にはもう夏の大三角形が顔を出し始めています。

さて、最近の映像機器の進歩はめざましく、高性能ビデオカメラを普通の電化製品の店でも買うことができるようになり、天体もビデオ撮影できるようになってきています。

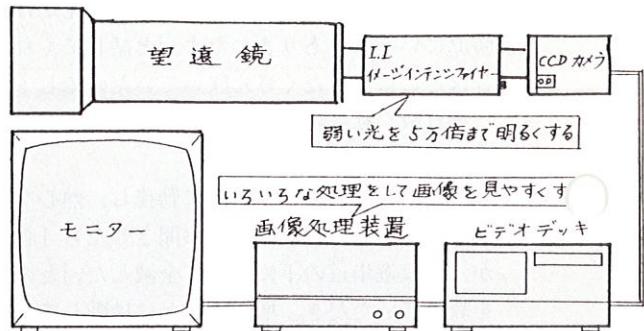
ただ、惑星など明るいものは別として暗い天体をカラーで映すことは難しく、高額の超高感度カメラが必要になってきます。センターではAVISにより、より暗い天体まで画面に映すことが出来るようになっています。

さて、AVISという言葉は、あまり聞きなれない言葉かも知れませんが、概略は、右の図のようになっていて、簡単にいえば、弱い光を増幅する機械と画像をより見やすいように処理する機械を組み合わせたものです。

*
右の写真は、惑星状星雲 M57です。望遠鏡で見るとドーナツ状に見えることからリング星雲とも呼ばれます。これは、対象が淡いため、I.I.を通して光を増幅し、画像処理装置で64フレーム平均加算した画像です。小口径の望遠鏡では見ることのできない中心星を見ることができます。

*惑星状星雲 太陽の質量の1~6倍の星が一生の終わり頃になると、星はどんどん膨張するので周りのガスは星の引力から逃げ出し、中心には高温度のとても小さな白色矮星が残る。周りのガスは中心星の光を受けて輝く。星の死んだ跡と考えてよい。

誌面では映像を写真でしかご覧いただけませんが、実際にはリアルタイムで星雲や星団を見る事ができます。淡い天体はカラーで見ることはできませんが、写真のように何十分も露出をかけて見ることができます。いずれはこうしたビデオをまとめてセンターでご紹介したいと考えています。ただCCDカメラの画角は小さいので大きな天体はちょっと無理があるようです。いずれもっと大きなCCD面を持った超高感度カラービデオが登場すれば、もっとたくさんの天体をカラーで撮影することができるようになるでしょう。



ツバメの便り

今年の春、センターではツバメの便りを募集しましたが、今年は過去最高の311通のお便りを頂くことができました。

ツバメの便り最終集計

市町村	件数	初記録日	市町村	件数	初記録日
福井市	66	3月7日	敦賀市	25	3月10日
武生市	34	3月12日	小浜市	13	3月10日
大野市	28	3月4日	勝山市	23	3月10日
鯖江市	21	3月11日	美山町	2	3月27日
松岡町	8	3月12日	永平寺町	3	3月10日
上志比村	3	3月18日	和泉村	4	3月10日
三国町	7	3月18日	芦原町	4	3月23日
金津町	5	3月7日	丸岡町	6	3月22日
春江町	4	3月22日	坂井町	2	3月24日
今立町	6	3月21日	池田町	3	3月13日
南条町	5	3月24日	今庄町	5	3月8日
河野村	0		朝日町	4	3月13日
宮崎村	3	3月12日	越前町	6	3月27日
越廻村	0		織田町	2	3月13日
清水町	2	4月2日	三方町	8	3月11日
美浜町	3	3月13日	上中町	2	4月2日
名田庄村	0		高浜町	4	3月12日
大坂町	0		合 計	311	

今年の第一報は、3月4日に大野市で確認されたのをはじめ、第2報は3月6日に同じく大野市で確認されました。そして、3月10日以降は確認情報が急増しました。

初認日は、例年に比べるとやや遅いようです。これは今年の冬が暖冬だといわれたものの2月下旬に北陸地方を強い寒波が襲い、県内全域にわたり降雪があったことが影響しているのかもしれません。

しかし、この寒波の後3月3日から5日にかけて北陸地方は移動性高気圧におおわれ、この頃から日中の気温も上がり始め、以後このことが原因で確認数が増加したと考えられます。

頂いたお便りを拝見すると、皆さん、毎年やってくるツバメにそれぞれの思い入れがあるようで、春の空を飛びまわったり巣作りをするツバメを暖かく見守る気持ちが伝わってきます。

以下センターに寄せられたお便りをいくつかご紹介します。

…略…農業の現状から納屋での農作業がなくなり、すべて屋外での農作業ばかりです。住宅への改造も計画したのですが、毎年ツバメがくるのでどうしても決心がつかず、ひたすらツバメの帰りを待ちました。ツバメが巣作りをするかぎり農家の納屋はそのままにして残し、ツバメの家にします。（美浜町 宇都宮肇）

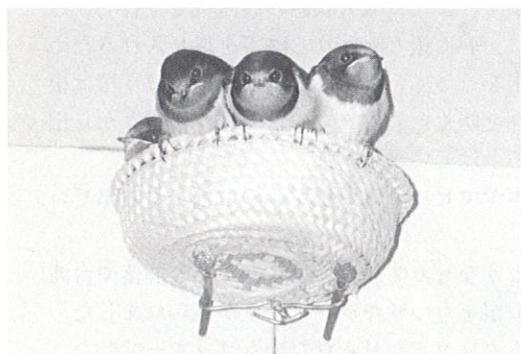
…略…私はツバメが毎年くると納屋の入口の障子戸の上の一枚のガラスを抜取り、ツバメが出入りできるよう気を配っています。ツバメは可愛いものです。（敦賀市 山内 敏）

…略…主人と「今年もツバメさん帰ってくれたね。」と感激し、何か心の中がほっとするものを感じました。私の家にも初孫が一才の誕生日を迎えて「なっちゃん、ツバメさんですよ。」と教える日を楽しみにしています。

（丸岡町 早石幹子）

左の写真は福井市の川崎ふみ子さんから送られたもので、巣作りがうまくいかないのでカゴを取り付けたところ無事に巣立ったそうです。

皆さんの近くにいるツバメはどうでしょうか。二回目の繁殖を迎え、ツバメにとっては、忙しい日が続きそうです。



マングローブ林を素足で歩く

自然観察指導員 柴田亮俊

NHK学園「自然観察講座」のスクーリングで、去る4月11日から14日まで、沖縄で自然観察会が開かれ全国から42名が参加しました。

福井県からは野鳥の会々員の特別参加もあって9名の大口参加となりました。

私たちの訪れた島は我国の最南端で、東京から2千km離れた石垣島^{いしがきじま}を起点に竹富島^{たけとみじま}とイリオモテヤマネコで有名な西表島^{いりおもてじま}です。

石垣島^{いしがきじま}は沖縄本島から飛行機で55分の所にあり竹富島^{たけとみじま}は、石垣島から高速船で10分、西表島^{いりおもてじま}は高速船で約1時間の所にあります。そして、この島は北緯24度で、台湾より200km離れた所にありちょうど台湾の中部と同じ緯度です。



オヒルギ

したがって年間の平均気温が24度以上で、亜熱帯の動植物がみられるとあって期待も大きかったわけです。

日本のアマゾンと言われている西表島^{いりおもてじま}の浦内川^{うらうちがわ}を河口から8kmほど船できかのぼりました。

この浦内川の河口付近には、マングローブ林が発達しています。このように海水の影響を受ける湿地帯にはオヒルギ・ヒメヒルギ・ヤエヤマヒルギなどのヒルギの仲間がつくる樹林ができ、タコの足のような気根や平たい板根などの独特な樹形を作ります。

マングローブとは亜熱帯から熱帯にかけて分布するヒルギ類の総称で、主に海水と淡水の混じりあう河口域に発達します。

ヒルギ類は陸から海に進出していった植物で、その根や葉に脱塩装置(塩分を除くしくみ)をもっています。また、酸欠状態の砂泥域で生育できるよう、呼吸根と呼ばれる酸素を取り入れるために気根をもっています。そして地中をはう根は根ぐされを防ぐためにタコの足のように所々から根をもち上げています。



ヤエヤマヒルギ

ヤエヤマヒルギは気根が幹の中ほどから出ていて樹木をささえる役もしているのが特徴です。

船からはマングローブのほかにヤシの木のようなヒカゲヘゴ・ウスラヤシの群落や台湾から入ってきたと言うホウライチク・平たい板根をもつサキシマスオウが見られました。

また水上に出た枝の上から餌をねらっているカワセミが見られたのもラッキーでした。船つき場の軍艦島で下船し、陸上で観察となりましたが、森林地帯のうす暗い林内にはツル性の植物が縦横に入り乱れ、大形木生シダのヒカゲヘゴや着生シダのシマオオタニワ

タリなどがジャングルの雰囲気をかもし出していました。

イリオモテヤマネコの餌となるオオトカゲやキノボリトカゲを見つけたのも大発見でした。

有名なイリオモテヤマネコは現在百頭ぐらい住んでいるとみられていますが、夜行性なので残念ながら見ることができませんでした。

しかし、現地でイリオモテヤマネコの研究をされている村田先生の案内でマングローブ林に素足で入って、つぶさに干潟の動植物を観察することができました。

水のひいたマングローブ林に近づくと一斉に動きだすベニシオマネキ、ヒメシオマネキなどが穴にもぐります。

ミナミトビハゼは人が近づくと、いち早く逃げます。そっと近づいてよく見ると、デメキンのようにとびだしたぎょろ目には、まぶたがあり目をとじることもできるのに驚きました。

川の岸辺には大きなキバウミニナがころがっていました。また、直径20センチもある大きなシロアリの巣を二つも見つけました。

オクラの実を長くしたような形のオヒルギの胎生芽は水面に落ちると泥にささって芽をだしたり、水に流されてほかの場所に芽をだす仕組みになっています。この偉大な生命力には感心させられました。



奥にある水田地帯に入ると、噴火口のような泥で作られた塔がありました。これはオキナワアナジャコの巣で、体長30センチにもなる大きなシャコの一種が地中に穴をほり巣を作るときに土をほり出すことによってできます。

半日以上もかかって土をほりかえし調査したところ、地中ではあみの目のように左右にトンネルがほられ、つながっていることがわかったそうです。

左の写真のような巣が水田一面に何百ヶ所もあってすごかったです。また、稲を植えてないこの水田には水牛が放牧されており、のどかな風景をかもしだしていました。

私の訪れた石垣島や竹富島、西表島の自然観察の記録は8ミリビデオで撮影したために写真資料が少なくて、十分説明ができず残念でしたが実に有意義な自然観察旅行でした。

※同観察会の記録ビデオテープ（VHS）90分・ご希望でしたらお貸します。

連絡先 〒914 敦賀市松葉町21-7 TEL 0770-22-5514

ナチュラリスト通信

自然情報コーナー

ツバメの集結地について

昭和62年9月8日、金津町笹谷の渡辺智さんからツバメが300~500羽の群れで集結している場所を連絡していただきました。

9月7日、場所は清水町大森から織田町にかけて約2000mの幅で確認されたものです。

一般に福井県では、県内各地で9月10日前後に群れができ、徐々に南へ渡来するようです。

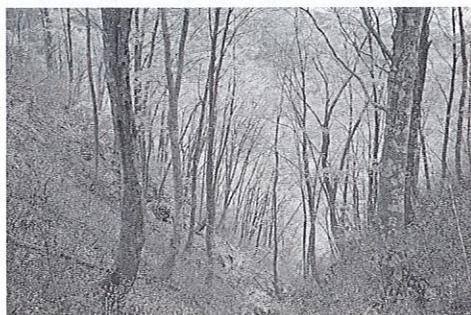
同じ年(昭和63年)「大野市では、9月5日頃に大野市役所周辺で集結し、大体1週間ぐらい留まり南に去っていく。」という情報が福井新聞大野支社から寄せられました。

皆さんの家の近くではいかがでしょうか。

県下では早いものでは、2月下旬に飛来し4月10日前後には各地で普通に見られるようになります。5ヶ月くらい県下に留まって南の国に去ってゆきます。

(石川県鶴来 林 哲)

芽吹き



春はかけ足でやって来るといいますが、山裾の小生宅周辺でももう50種近い樹木や山野草が花を開き、早いものは若葉に変わり、春の息吹に驚かされます。オオイヌノフグリ、セイヨウタンポポは2月上旬に可憐な花を見せ、雪におおわれながらも生き抜いておりました。

開花暦もうっかりしていると見逃しそうです。例年との比較はまだまとめておりませんが、春の陽気との関連がデータとして出てくるとおもしろいと思っています。

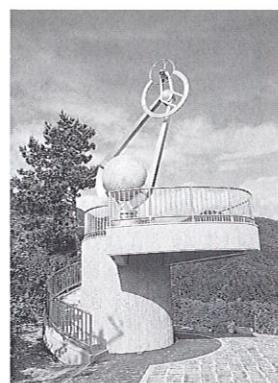
まだ、ツグミなどの冬鳥も残っていますし、ツバメを始め多くの夏鳥も姿を見せ、にぎやかなさえずりの中で繁殖が始まります。モズは巣立ち間近で、換気扇のダクトのセグロセキレイ、軒下の巣箱のシジュウカラの何時の間にかの抱卵。農作業とともに自然の観察も多忙です。

山肌の木々に先がけて薄緑色の葉を開くブナが開き終わる頃、葉裏の密毛が銀色に輝くコナラ、ミズナラ、クヌギが雄花の穂を幾条にもたれ下がり、子孫繁栄のたくましさを見せてくれる今日この頃です。

4月20日

(鯖江市 八田七郎右エ門)

自然保護センターにモニュメント完成



センターに月球儀のモニュメントが完成しました。これは、宝くじ協会から寄付されたもので、上は展望台になっていて、月球儀は、手動で回転するようになっています。

民家の天井裏に巣作りしているムササビ

住宅は、敦賀市小河口5-7にあって所有者の小笠富安氏より従前より2階天井裏にムササビが住みついているためにホコリ、ダニなどが室内に落ち迷惑しているので何とか処置したい、捕らえてもよいだろうか等の相談を受けたことがありました。

このムササビは小犬ぐらいの大きさで18年前頃より裏山から一旦庭のケヤキへ飛び、それからどこからか家の中に入ってきたました。2年前には天井裏で爪先のカリカリとする小さな足音と大きな足音が聞こえ、繁殖しているようでした。

また、このムササビは連日22時から23時にかけて外出し、4時頃に足音をさせて帰ってくるので、家人が目を覚ましてしまう生活が続いているという話でした。

また、近年村人がムササビを捕らえたこともあったとか。

この件とは別に天筒山麓の南側にある斎場の

木造屋根裏にもムササビが住みついており、一昨年の屋根ふき替え工事の際に、急に飛び出してきて作業員を驚かせたこともあります。また戻ってきて生息しているようにも聞いています。

(敦賀市 福岡 修)

白いタニウツギを見ました。



最近今立町内の山を歩いているときに白い花のタニウツギを見つけました。タニウツギは桃色の花しか見たことがなかったので、白い花を見たときは少なからず感動しました。少し注意して山を見ると他にも数株白花のタニウツギを見ることができました。県内の他の地方にも白花のタニウツギはあるのでしょうか。

(春江町 井上清一)

行事報告

かしまがり 横曲（中池見）湿地自然観察会

春を探しにいこう

4月7日に緑と水の会主催の第1回自然観察会、G o W (Green or Water) ウォークが敦賀市横曲において開催されました。



前日までの雨も上がり、満開の桜並木の山道を中池見までゆっくり登りつめました。山に沿った小道は、ニホンタンポポ、ウマノアシガタ、クサノオウ等で黄色に染まっています。また、休耕田にはサワオグルマが咲きはじめミツガシワの花も白い可憐な花をつけていました。

中池見で子供たちは、池や小川を覗き込みメダカやオタマジャクシを追いかけ、イモリをつかまえ、大人たちを驚かせていました。今回の観察コースは約2キロくらいでしたが、参加者の多くは、「こんな場所があることも知らなかつた。コンクリートの川ではなく、昔遊んだ川を思いだした。」また「ひと昔前の田園風景を思い出し、ゆったりとした気持ちになれた。」といっていました。また、樫曲の奥野さんから新田開発の歴史や太平記、朝倉始末記に記されている手籠城の堀についてのお話も聞くことができました。

最後に観察会のまとめでは、野鳥保護協会の田結さんと自然観察指導員を代表して柴田先生にお話をいただき解散しました。

この中池見は、市街地の近くにありながら別世界のような静けさがあり、自然が豊かで心の安らぎを覚える数少ないところです。しかし、市の工業団地計画の中心に入り、地質調査も終了したとのことです。

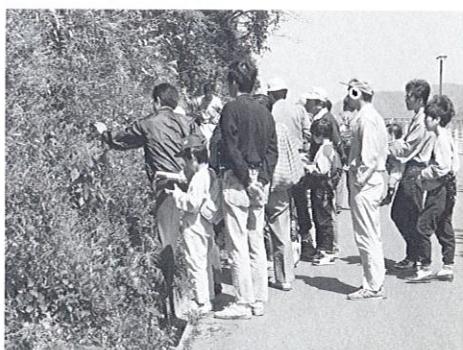
緑と水の会では、自然観察会などを通し、ふるさと敦賀の残り少ない貴重な自然を一人でも多くの人に知ってもらうために、年4回、同じ場所で、季節の移り変わりを観察しながら、失われゆく自然を見つめ、考えるために樫曲（中池見）で観察会をしていく予定です。参加ご希望の方は、下記担当者までおたずねください。

(ナチュラリスト集団 緑と水の会)

敦賀市東洋町6-37 佐々木智恵子

Tel 0770-23-5003

植物観察会



4月28日快晴の中、小浜公園で上坂先生、福永先生、城谷先生をはじめ自然観察指導員の方を招いて植物観察会が開かれました。当日は嶺南特有の植物やクモの話を聞くことができました。参加者は52名でした。

バードウォッチングin宝慶寺

5月12日、愛鳥週間にちなんで大野市宝慶寺で野鳥の会の方の協力を得てバードウォッチングを行いました。

確認された鳥

クマタカ・ウグイス・アオゲラ・キビタキ・カケス・クロツグミ・ヒヨドリ・ヤブサメ・エゾムシクイ・ホオジロ・ヤマガラ・シジュウカラ・ヒガラ・イカル・オオルリ・サシバ・セグロセキレイ・キセキレイ・ハヤブサ・サンショウクイ・キジバト・メジロ・コゲラ



自然情報募集

ナチュラリスト通信のコーナーでは、県内各地の自然情報を掲載したいと考えています。皆さんから寄せられた「こんなもの見つけた、こんなことがあった」という自然情報を載せ、読者の皆さん方との交流の場にしていきたいと思います。情報をお持ちの方はセンターまでお知らせ下さい。

目次

表紙 オキナグサ	1
アシナガバチの生活	羽田 義任 2
ケイ化木の紹介	多田 雅充 4
オキナグサ考	山本 留 5
ビデオカメラによる天体撮影	大沢 安一 6
ツバメの便り	7
マングローブ林を素足で歩く	柴田 亮俊 8
ナチュラリスト通信	10

FUKUI NATURE GUIDE 森遊

<第 2 号>

発行日 1991年6月20日

発行者 福井県自然保護センター

福井県大野市南六呂師169-11-2

〒912-01 ☎0779-67-1655

FAX 0779-67-1656

印刷 朝日印刷株式会社